



医学教育シリーズ

保護者懇談会での講演
「保護者の望ましいコミュニケーション」についての
アンケート結果の分析

磯貝典孝¹ 池田行宏² 松尾 理³

¹近畿大学医学部形成外科学教授

²近畿大学医学部附属病院安全衛生管理センター講師

³近畿大学名誉教授

Analysis of questionnaire after the lecture named “Desirable communication to establish autonomous learning habits” at guardian meeting

Noritaka Isogai¹, Yukihiro Ikeda², Osamu Matsuo³

¹Prof. of Department of Plastic Surgery, Kindai University Faculty of Medicine

²Lecturer of Center for Occupational Safety and Health Management

³Emeritus Prof, of Kindai University

抄 録

保護者懇談会で「医学生をもつ保護者の望ましいコミュニケーション（対応）とは一自律的学習習慣の確立のためにどうするか？」と題して講演し、終了後のアンケートを分析した。設問肢を選ぶ質問には9割近くが「良い」、「大変良い」などの肯定的な反応であった。自由記載欄には多様な意見が書いあり、それらを頻出単語とその関連語などを中心に分析した。その結果、保護者が講演で示された承認、モチベーションなどをたいへん良く理解出来たと思われた。特に、保護者が「子供」を「思う」と言う関係性が非常に強く、普段から成績や生活のことなど心配されている背景が伺われた。また少数の自由記載例の中に指導教員や学部の対応が望ましいと思われる意見が見られた。

The lecture entitled with “Desirable communication to establish the students’ autonomous learning habits” was addressed at the guardian meeting held in Kindai University Faculty of Medicine. After the lecture, a questionnaire sheet was delivered to participants. To the question how deep they understand the lecture, more than 90% showed positive response. To free description, more than 200 sheets was recovered and analyzed. The most common words written in the sheet were analyzed in terms of their appearance and their connection. It is clear that most of the participants understood the lecture, but in few description, some requested to the supervisor of the students or faculty to guide their students more carefully.

Key words : コミュニケーション, モチベーション, 承認, 学習習慣, 自律的
利害関係 : なし

Key words : communication, motivation, approval, learning habit, autonomous
COI : None

I はじめに

大学教育を支えるのは教員の主たる役割であるが、学生生活を全般的に見渡せば、教員と保護者の2人3脚が望ましいと思われる^{1,2}。特に昨今の学生は、自律性に乏しく、教育ママや教員の直接的な指示がないと勉学などに自律的に取り組めない生活に慣れてしまっているの、大学に入学したから即独立した自律的学生になるとは、決して言えない。

医学部は他学部と異なり、6年の学部生活の後、2年の初期研修³を経て(法的制度として)一人前になるが、これで終わりではなく、医療人としての始まりなのである。医学・医療に関する情報の指数関数的な増加と質の飛躍的な向上について行けるように、生涯を通して学習しなければならないのである。そのために、自律的学習習慣の確立が必須なのである⁴。

本稿は、その意図を持って2017年5月21日に開催された保護者懇談会で「医学生をもつ保護者の望ましいコミュニケーション(対応)とは—自律的学習習慣の確立のためにどうするか?」と題して講演し、その終了後に実施したアンケートを内容分析したものである。

II 講演内容

講演の内容の流れは、まず「モチベーションとは」および「モチベーションのジレンマ」へとモチベーションを中心に話を始め、ついで参加者が体験する試みを「閾値」「傾聴」などをテーマに実施した。そして、「目標設定理論」「承認」と続けて、最後に「内発的モチベーション」を上げて、ゴールの「自律的学習習慣の確立」の具体的な方法へと発展させた。

始めに、保護者が「お子さんをどの位理解していますか?」と題して、次の質問を投げかけた: お子さんの人生目標を知っていますか? 友人の名前を5人以上言えますか? などの7つの質問を掲げた。ここで、ほとんどの保護者が子供さんの事を分かっていないと実感された。つまり、過去に親子間の自己開示を含む心の交流があったとは言えない実態を体感して頂いた。さらに入学までの歴史を振り返り、親子間の会話で「勉強しているか? クラブばかりしてるのでは?」などの(問い詰める)会話が主体ではなかったかと思いはせて頂き、そのような詰問的会話では心が開かず本心が分からずじまいになったと想像できよう。保護者が人生の先達として、生きる見本のような行動をお子さんに見せてくれたかどうか重要なのである。

一般的にモチベーションとして理解しやすいのは、

外部から指示・誘導される外発的モチベーションである。これは、結果がすぐ行動として見えてくるが、そこに致命的欠陥がある。すなわち、外発的モチベーションが多用されると、心の奥から湧き出す内発的モチベーションを失わせ、かえって成果が上がらなくなったり、創造性をむしろ、好ましい言動への意欲を失わせる。さらに、問題視されるのは、ごまかしや倫理に反する行為を助長するなどの副作用的なことが指摘されている。

これに対して、内発的モチベーションは、内なる心から湧き上がる「やる気」であり、フロー経験(忘我の境地)とも言われ、創造性につながるのである。その際、本人の心の内にある「報酬系」が満たされている状態と言われている。モチベーションの分類には、緊張系、希望系、持論系に分ける理論⁵や、ERG理論⁶、モチベーション3.0⁷などいろいろある。

最近の脳科学の進歩を踏まえて、脳のニューロンの活性化を体験する参加型のエクササイズを行い、保護者に実感してもらった。さらに、モチベーション向上にミラーニューロン⁸を活用する例を示した。すなわち、他者の言葉、行動、判断などが、あたかも自分の脳で行われているように反応するのがミラーニューロンで、保護者も家庭では無意識であっても生きる見本を子供さんに示しているのである。

学生は、教員からのみならず保護者からの「承認」も必要である⁹ので、保護者から子供さんへ「承認している」ことを伝える習慣が望まれる。そのような承認を積み重ねていると、子供さんの内発的モチベーションを上げることになる。上手な承認のためのコツとして次のことが言える: ①行動を具体的に承認する。②時間をあけず、早目に承認する。③心から承認する。この3つは、最低限のことで、内容により、大勢の前で承認すると一層効果が上がる。

子供さんの人生目標としての「医師になると言う自己実現欲求」¹⁰(図1)に保護者として、どう関わ

医師になると言う自己実現欲求



図1 医師になると言う自己実現欲求 (17から引用)

るかは難しい問題であるが、上手に承認を行うことによって側面的にサポートできる。人間は社会的な動物であり、承認は社会関係、人間関係のなかで行なわれるものである。そもそも人間には他者からの承認によって自分を確認できるという他者依存的、受け身的な側面がある¹¹。とりわけ他人の目を意識し、周囲との人間関係を重視する日本人にとって、自分を肯定し、確認するためにも「他人からの承認が欠かせない」のである。

承認にはいろいろな種類があるが、重要なものは、存在承認、行動承認、結果承認などであろう。存在承認とは、存在そのものを認めるもので、ちょっとした変化にも気づき、そのことを伝えるのである。行動承認とは、行動をそのままに認めるもので、これが一番使いやすいと思われる。結果承認は、とにかくよくやった！と言えるものである。

以上を踏まえて、家庭内でのコミュニケーションで大切なことは、子供さんの話をしっかり傾聴し、尋問的会話を避け、良い行動を促す前向きな質問をしながら、子供さんの自己実現へ向かう伴奏ランナーの気分で接することである。

Ⅲ 終了後のアンケート

終了後に、選択問題と自由記載とからなるアンケートを実施した。設問内容は、◎問1 今日の講演内容の流れをスムーズに理解出来ましたか。◎問

2 内発的モチベーションのもつ意義を理解出来ましたか。◎問3 外発的モチベーションを理解出来ましたか。◎問4 自律的学習習慣を確立するスキルを理解出来ましたか。◎問5 お子さんの自己実現欲求を知る意義(意味合い)を理解出来ましたか。◎問6 お子さんの日常生活に承認のためのスキルを実践出来そうですか。◎問7 お子さんの日常生活で傾聴を実践出来そうですか。◎問8 お子さんの日常生活で行動承認を実践出来そうですか。◎問9 今日の講演内容に満足しましたか。と言う設問に対して、選択肢を4つ用意し、回答を求めた。この際、明確な反応を示さない5選択にできなかった。

いずれの問に対しても「出来た」、「出来そう」、「満足した」という回答が最も多く、参加者の大変良好な反応が見て取れた。この選択肢の反応数と「大変出来た」、「大変出来そう」、「大変満足した」などの反応数とを合計して、ポジティブな反応の割合を出すと、いずれも高率で、問2と問3が98.4%であった。次いで、問5の96.8%、問1の95.9%、問9の95.2%と続いた。その他の設問に対しても85%前後であり、全てに対して、肯定的な反応が大多数であった。

典型的な反応分布を図2に示しているが、ほとんど選択肢3と選択肢4からなることが分かる。

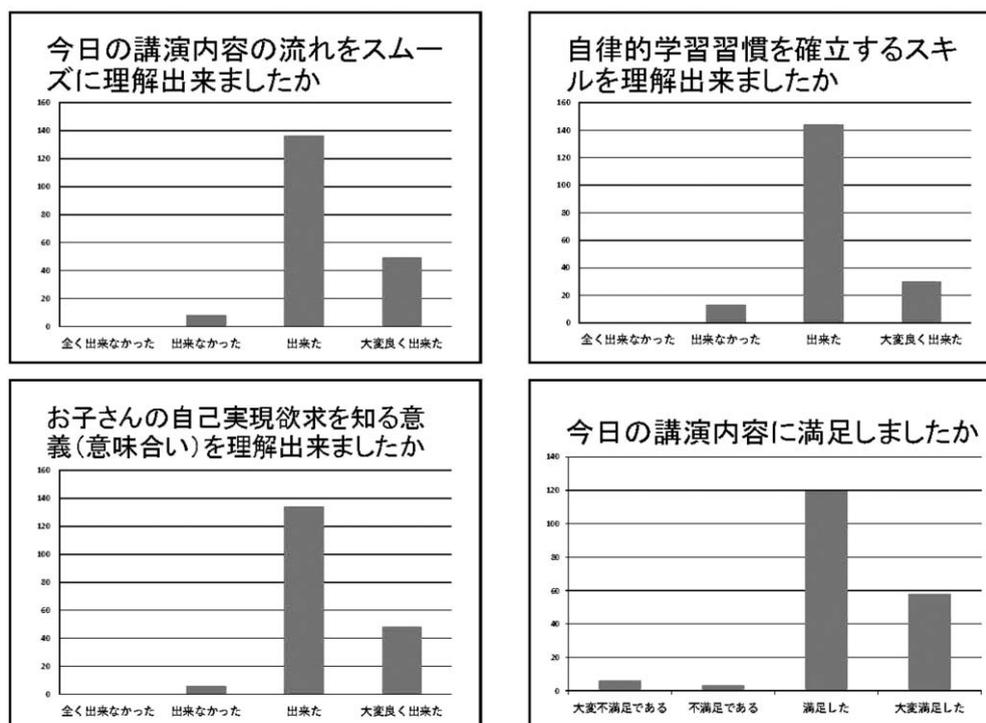


図2 終了後のアンケート結果

自由記載の分析

アンケートの最後に問9として自由記載欄を設け、意見、感想など課題を決めず、自由に記入して貰った。その結果、215人の保護者からの自由記載が得られたので、それらを今後の学生指導や医学部教育改善のための参考資料になることを目的として分析した。

まず、頻出単語を調べるために自由記載の文章を単語ごとに分けて分類した。すなわち、自由記載中の単語を下記のように単語ごとに区切った。例：「実践/できれ/ば/非常/に/良い/と/思い/まし/た/が/、/子供/が/一人暮らし/の/男の子/という/事/も/あり/、/なかなか/時間/が/とれ/ない/です/。」。このようにして得られた単語数を計数した所、3,463で、この内から助詞や助動詞のようにどのような文章の中にも表れる一般的な語を除外すると、1,356であった。抽出された語（名詞や動詞など全て含む）を出現頻度の順に並べると、表1のように「思う」という動詞が1位であった。その中で、頻出度1位の「子供」と言う単語が入っている記載例を示すと、図3のようになった。

これら子供を文中に記載されている文を内容別に分析すると、大学へ感謝が記載されているのがあり、

表1 頻出度の高い単語のリスト

思う	53	良い	9
子供	36	話	9
ありがとう	28	今後	8
講演	23	見る	7
承認	18	今	7
実践	16	今日	7
聞く	16	大学	7
先生	15	会話	6
モチベーション	12	頑張る	6
松尾	11	貴重	6
大切	11	合格	6
大変	11	少し	6
お話	9	褒める	6
もう少し	9	話す	6
親	9	コミュニケーション	5

◎実践/できれ/ば/非常/に/良い/と/思い/まし/た/が/、/子供/が/一人暮らし/の/男の子/という/事/も/あり/、/なかなか/今後/子供/へ/の/接し/方/を/改善/でき/そう/な/気/が/いたし/まし/た/。

◎大切/な/こと/は/子供/の/する/こと/を/承認/する/こと/。

◎子供/に/期待/する/と/同時に/背中/を/見/られ/て/自信/を/無くす/親/に/ならぬ/よう/に/、/むしろ/引き締まる/

◎子供/も/これから/いろんな/壁/に/ぶち/当たる/時/が/来る/と/思い/ます/。

図3 「子供」と言う単語を含む記載例

「まずは子供に「素晴らしい環境、先生の下で学べていいね」と伝えたいと思います。」とあり、保護者の喜びが表出しているのが良く分かる。さらに、合格の喜びに関連して「子供は近大に合格できたことが嬉しくて毎日感謝の気持ちを持ちながら頑張っているようです。」と、本学への合格を率直に喜んでいる子供さんの姿が記載されている。

講演を聞かれた保護者のご自身への期待・決意として、「子供に期待すると同時に背中を見られて自信を無くす親にならぬように、むしろ引き締まる思いを持ちました。」、「今日、先生からお聞きしたことを生かしながら子供たちを応援し続けようと思います。」、「子供の承認頑張ります。」などと記載されていた。同時にご自身の反省として、「今日の講演を聞いて子供の目なんてしばらく見たことがないと気が付きました。」、「今まで子供に対する対応が悪かったと反省しています。」と、記載されていて、新たな気づきが見られた。

子供さんへの今後の接し方などに関して、「ご講演ありがとうございます。できるだけトライしてみます。」、「子供の学習習慣についてだけではなく、家族、職場でのコミュニケーションに用いたいと思います。」などと、記載されていた。

また、肝心の子供さんの問題として、「本人のモチベーションが上がらないのが難であり、頭を抱えている状態であります。」、「子供の接し方で困ってましたので、大変助かりました。」などと、現状の問題を認識されていると思われ、今後の展望が見えてきたとみられる記載があった。

大学への注文として、「医学部も子供の出欠状況などスマホで確認できるシステムにしていだきたい。」とあり、今のIT化の時代に即応した情報提供を望んでおられることが見えてきた。

2番目にランクされた「ありがとう」と言う言葉が28人の自由記載にあった。例えば、「今日はとても貴重な講演をありがとうございました。」、あるいは、「興味深い講演でした。ありがとうございました。30年ぶりの松尾先生の講義を拝聴させていただきました。」のように演者を含めて講演内容に関するものなどがあった。

なるように設定した。設定条件として、抽出語を40とし、出現数の多いほど大きい円で描画した。また、出現数を5以上で最低3つの文書に出現するものとした。その結果、下の図4が得られた。このネットワーク図を上述の如くクラスター分析の結果と照合しながら、記載文の中身を汲み取る作業をした。

その図から保護者の考え・思いなどが見えてきた。すなわち、「思う」を中央にして「子供」と「承認」が結ばれていて、さらに「承認」から、「大切」、「頑張る」、「褒める」と結ばれ、「会話」が続いている。これらのことから、講演内容をしっかりと理解して下さったと思われる。

保護者の記述：「今日はありがとうございました。子供の承認頑張ります。」、「相手を承認することからすべてが始まることになりました。」、「貴重な講演をありがとうございました。承認、上手に頑張りたいと思います。」

また「講演」から「松尾」、「先生」、そして「思う」に結ばれ、演者の事を思われている。「講演」を中心にして、「貴重」と「聞く」に結ばれ、「貴重」から「ありがとう」と「大変」とに分かれ、「大変」が「今後」の「参考」にと結ばれている。講演から聞くに結ばれた線は、「話」、「お話」、「今日」と別れ、「お話」に「良い」が結ばれていた。

保護者の記述：「松尾先生の講義を拝聴させていただきましたが、本日は非常に感動いたしました。」、「今後子供への接し方を改善できそうな気がいたしました。」、「子供もこれからいろんな壁にぶち当たる時が来ると思います。その時今日聞いたことを実践できたらと思いました。」、「入学してすぐ、大変ありがたい講演を聞くことができ、感謝しております。」

また、話の主題に関連した「モチベーション」に関して、「今」と結ばれ、さらにクラスター分析から「コミュニケーション」と同一範疇に属していることが明らかになり、さらに「コミュニケーション」が「難しい」と結ばれている。

保護者の記述：「今日はとても貴重な講演をありがとうございました。親子でモチベーションをあげて日々生活してゆけそうです。」、「承認することがとても大切であるとわかりました。」、「メールやラインだけではなくもっと顔を見ながら声を出してコミュニケーションをとる大切さを再確認しました。」

学生生活に関連した単語として、「学生」を中心にして「大学」、「試験」、「合格」と結ばれ、「合格」から「近大」へ、「近大」から「感謝」と「持つ」とに分かれている。

保護者の記述：「素晴らしいお話をありがとうご

ざいました。とても良かったです。」、「親としての気づきがあり、今後に生かしたいです。ありがとうございました。」、「話をきちんと聞くという当たり前のことをちゃんとやっていく大切さを認識できました。」、「専門の学習量が増える学年ですが、本日の内容を実践し、自律的学習習慣につなげたいと思います。」、「子供が幼いころにこの講演を伺っていたら、もう少しモチベーションを上げられたかもしれません。」、「医学部合格するまでは外発的モチベーションでやってきた私。確かに修羅場もありました。結果は近大に合格できたからこそ今は感謝してくれています。つらい思い出が多いです。」

「認識」が「大事」に結ばれ、それが「反省」、さらには「見本」に結ばれている。「毎日」「意識」することが大切と理解されていると思われる。

保護者の記述：「承認することが、大切だという事はかねてから感じていたことですが、お話を聞いて認識しました。」

記載の頻度は少ないが子供さんへの注文、あるいは医学部（あるいは指導教員）への提案を含んでいるものに次の自由記載があった。

保護者の記述：

A 指導教員の対応が望まれる記載

「連絡をあまりとってくれない子供です。」、「電話しても忙しいから返信はないです。」、「メールも返事有りません。」、「子供は親のことを馬鹿にします。」。このような記載をした保護者に安堵感を持って学生を見守ってもらうために、指導教員がこまめに学生対応する必要がある。

B 医学部で対応できる内容

「親の背中を見ているとの講演でしたが、試験が忙しくふる里には帰れません。」、「できない子供に温かく見守ってほしいです。」、「試験づけではノイローゼ学生が増えたそうです。」、「目的のない試験はダメだそうで、試験問題の中身の解説まで欲しいと思いました。」、「事務的な連絡ごとを本大学や他大学など、大学としてしっかり連絡してほしい。試験や連絡事項のことです。」、「他大学は近大のカリキュラムを知らないのです。ぜひ近大の先生方にもご協力していただければと思いました。」などの意見は指導教員とともに学部対応が望まれる記載である

C 演者への注文

「松尾先生の話の本等の読み物で読みたい。」や話し方などへの注文の記載が見られた。

IV 考 察

ここ数年留年者数が増加していることが、学内だけでなく、多くの大学で見られる現象である¹⁴。そこに地域枠設定による入学者の質の問題を指摘する向きもあるが、入学させた以上、大学側は最大限の努力をして、良き医療人として社会に輩出させる必要がある。しかし、昨今の医学研究の質的進歩ならびに量的増加により、大学で教員が全てを講義・実習でカバーできない時代になっている。ここに、学生自身が自ら学ぶ態度が求められるのである。さらに、卒業後にrippana医療人として成長し、患者に最適の医療を提供するために、絶えず最新情報を取り込み、自らを磨き上げる生涯学習¹⁵ 習慣の確立が必要なのである。その習慣の確立のために、学生時代に自律的学習習慣を持つことが、良い学生生活を送るためにも必要である⁴。試験があるから勉強するのではなく、将来自分が目指す医師像を実現するための土台作りと学生本人が自覚して、勉強に励む習慣作りから始まる。

大学での高等教育では、大学教員とともに保護者が心理的なサポートを上手に発揮して頂くと、学生生活が一層充実したものになる。大学でも、家でも、「勉強せんかい！」と言われ続ければ、学生は参ってしまう。その目先のことで過ごしていくよりも、自己の夢の実現、自己の人生目標の達成のために、保護者と教員とが、車の両輪のように学生をサポートするのが理想的である。本学の教員のために、学生指導の具体的な方法をすでに論文にしている⁴ ので、この度の保護者懇談会では、保護者がどう振舞うべきかを主題にして講演した。講演内容を簡単に方法の所に述べた。本稿はそのような講演を聞いた保護者の反応を終了後にアンケート調査し、分析したものである。特に自由記載が200件近くにもなり、分析しがいのあるデータが得られた。

終了後のアンケートとして、設問1～8の反応の一部を図に示しているが、ほぼ全ての設問で9割近くがポジティブな反応であった。すなわち、講演を理解でき、内容に満足したことがうかがえる。

自由記載には、何を書いてもいいように案内した。その自由記載内容を分析し、頻出単語がどういう単語と関連して出てきているかなどを分析した。その結果、講演内容に関して、理解が充分進んでいると思われる。すなわち、保護者の望ましい行動が出来るような反応が表出されている。主なポイントは上記の自由記載の欄に記載したので、ここでは、その意味合いと大学(教員)が今後の学生指導に留意する点について述べる。

指導教員がすぐさま対応できることは、実家を離れて下宿している学生へのメンタルなサポートであり、その中に保護者への連絡をかかさず続けることを指導する体制の構築をあげたい。仮に週に1回でも子供と保護者とが電話(ラインやスカイプでも同様)する習慣にしておけば、心理的なギャップが少なくなり、年度末に成績が通知されて初めて子供の生活(勉強)実態を知ることになって、驚く事態もなくなる。

本保護者会での医学教育の現状の説明に加えて、学生をサポートする保護者の役割を学生自身の人生目標と踏まえて総合的に理解し、自律的学習習慣が確立するような家庭内でのコミュニケーションの確立が望まれる^{16,17}。

引用文献

1. 文部科学省. 「教員意識調査」「保護者意識調査」報告書 2007 [cited 2018 20180430]. Available from: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyuyo/07061801/002.pdf.
2. 文教大学父母と教職員の会. 父母教について [cited 2018 20180430]. Available from: https://www.bunkyo.ac.jp/etc/fubokyo/about_us/.
3. 医師法第16条の2第1項に規定する臨床研修に関する省令, (2002).
4. 松尾理. 学生に自律的行動を引き起こさせる指導法について —低学力・低意欲の学生への対応—. 近畿大医誌. 2015; 40(1,2): 55-59.
5. 金井壽宏. 働くみんなのモチベーション論. 東京: NTT出版; 2006. 358 p.
6. Alderfer C. Existence, Relatedness and Growth: Human Needs in Organizational Setting. New York: The Free Press; 1972. 198 p.
7. 大前研一. モチベーション 3.0. 東京: 講談社; 2015. 300 p.
8. 村田哲. ミラーニューロンの明らかにしたもの: 運動制御から認知機能へ. 日本神経回路学会. 2005; 12(1): 52-60.
9. 正田佐与. 行動承認—組織の能力を最大化する「認める力」—. 東京: パブラボ; 2014. 214 p.
10. Maslow AH. A theory of human motivation. Psychological Review. 1943; 50: 370-396.
11. 太田肇. 承認欲求—「認められたい」をどう活かすか? 東京: 東洋経済新報社; 2007. p. 237.
12. Hemsley B, Palman S, Dann S, Balandin S. Using Twitter to access the human right of communication for people who use Augmentative and Alternative Communication (AAC). International Journal of Speech-Language Pathology. 2018; 20: 50-58.
13. Higuchi K. KH Coder. Retrieved from <http://khc.sourceforge.net/en/>; 2014.
14. ニュース・医療維新. 「医学部1, 4年生の留年」, 定員増以降に増加 全国医学部長病院長会議, 「ストレート卒業」は減少 2017 [20180420]. Available from: <https://>

- www.m3.com/news/iryoishin/512200.
15. 文部科学省. 大学設置基準の一部を改正する省令の施行等について 1991 [updated 19910624. Available from: http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910624001/t19910624001.html].
16. 松尾理. 学生の自律的行動を起こさせるコミュニケーション力の醸成. 札幌医科大学 FD 活動報告書. 札幌: 札幌医科大学 FD 委員会. 2015. p. 108-119.
17. 松尾理. 学生の自律的学習へのモチベーションを上げる方策を考える. 近大医誌. 2017; 42(1,2): 33-39.